

科学実践における住宅

——昭和初期の健康住宅の事例から——

神戸松蔭女子学院大学 西川純司

1 目的

これまでの社会学では、住宅は家族形態や社会制度を反映したもの、もしくは社会的な構築物として分析されてきた。しかし、これらの研究では、住宅が社会と自然のあいだに実在するという当たり前の事実が十分には問われてこなかった。そこで本報告では、近代日本における住宅を科学実践のもとで考察することを目的とする。「物質的で行為遂行的な実践において住宅はどのように構成されたのか」という問いを設定し、自然現象がどのような道具立てや語彙のもとで、観測され、調整され、住宅や居住者と切り結ばれていたのか、その実践を歴史的に記述し考察する。

2 方法

本報告での分析対象は、昭和初期の建築学者・建築家による健康住宅をめぐる科学実践である。健康住宅とは、気候や風土といった環境が科学的に分析され、そのもとで居住者の健康のために間取りや設備の設計が行われた住宅である。STS や科学実践論を参照しつつ、この健康住宅をめぐる実践をその物質性と行為遂行性に着目して分析する。具体的な分析の資料として、日本における環境工学のパイオニアとされる藤井厚二および山田醇の著作や設計・施工活動を取り上げる。

3 結果

分析の結果、健康住宅の実践において、①住環境に作用するものとして自然現象が環境工学的な観点から分析された。日本の気候条件に関する科学知識は、藤井自らが自邸を実験住宅として設計し実験するなかで産出されるなど、物質的な実践と不可分なものであった。②こうした知識にもとづき、欧米の様式を単に模しただけの住宅が批判され、日本固有の環境に調和した住宅づくりが実践された。たとえば、住宅の間取りは、当時の文化住宅の流れを受けながらも、気候や風土などの自然環境によっても大きく規定されていた。住宅内での換気や日照が重視され、そのための間取りがとられ設備や建材が使われるなど、自然的要素がうまく働くような条件が整えられた。③それゆえ、居住者は自然環境と対峙する主体ではなく、そうした固有の環境との連続性のもとで扱われていた。衛生的な住宅は、居住者の身体的な健康あるいは死亡率を大きく左右する重要な要因とされていた。

4 結論

住宅を主題としたこれまでの研究は、もっぱら社会と住宅の関係性に関心を寄せてきた。だが、今回の分析の結果、住宅は人と自然とモノのつらなりのなかで構成されるものであることが示された。健康住宅の実践は、自然環境を調節し住宅と結び合わせることで居住者の健康を目指すものであった。そのなかで居住者は、それが住まう環境との相互作用のもとにおかれた物質的な存在として捉えられていた。こうした知見は、住宅を社会と自然という二分法の一方に還元せず、それらの間の曖昧さにおいて捉えることの必要性を示唆している。

文献

Latour, Bruno, 1999, *Pandora's Hope: Essays on the Reality of Science Studies*, Harvard University Press. (=2007, 川崎勝・平川秀幸訳 『科学論の実在——パンドラの希望』産業図書.)